

名門千歳ラグビーを愛する9名のラグー

第23期生一同

23期生は部員数9名(FW5名、BK4名)で主将は佐々木晋之(CTB)、副将が佐藤茂(FL)の陣容であった。

思い出話となるとどうしてもハードな練習で精神的にも肉体的にも大きく成長できた夏合宿の話となる。我々23期生は1年時には群馬県の渋川市にて合宿を行った。寺の境内に現役OB全員が仏様と寝食を共にする生活で、毎食のメニューは仕出し弁当であったと記憶している。地元の全国大会常連校である熊谷商工(現熊谷工業)と1年生主体のチームで対戦し大敗した試合が強烈な印象として残っている。2年、3年時の合宿は宇都宮市内の丸治旅館に宿泊し宇都宮総合グラウンドにて行った。特に3年時の合宿においては春の公式戦よりチームとしての型ができていたこともあり、OB・コーチ陣の期待もあってか合宿初日よりハードな練習となった。当時栃木県を代表するチームの作新学院、宇都宮工業、今市工業との練習マッチを連日行い、ゲーム内容の悪かった日は日没まで続いたハードな練習を思い出す。この合宿中にロックの渡辺が脱水症状で倒れ、フランカーの秋が鎖骨骨折、2年生の新井(卒業後立教大にて活躍)が手首骨折等々チームの中心選手が数名リタイヤした。救急車の出動が数度あったためか、警察が「シゴキ」ではと疑い、旅館に事情を聞きに来たというエピソードも後日聞いている。過酷な合宿ではあったが合宿中に地元有力高校との練習マッチにおいて互角以上の戦績を残せたことは、大きな自信となり秋の公式戦に期待がかかった。

秋の国体予戦においては3回戦で、当年度全国大会に出場することになる日大二高に勝利しベストエイトに進出したが、夏合宿でのケガにより前記3名が戦列復帰で

きずベストメンバーが組めなかった事もあり惜しくも翌週敗退した。

チームの最終目標であった全国大会予選においては、順調に勝ち進み準々決勝にて強豪本郷高校との対戦となった。前半開始早々に佐々木のペナルティゴールで先制したが、本郷高校エースの栗原(後の全日本CTB)のトライで同点とされ一進一退の攻防の続く中、味方FBの申込が脳震盪にて退場となり、当時はメンバーの補充ができないルールの為14人で戦うこととなった。このハンデにもかかわらず八代の独走トライ等もあり互角以上に戦ったが、善戦むなしく僅差にて敗退した。これにより悲願であった花園における全国大会出場には駒を進めることが出来なかった。

我々23期生は18期生、20期生の若手コーチを中心としたOB諸先輩並みに慶応・明治大学の現役の指導を得られるという環境にも恵まれ、当時の高校生として全国レベルのプレーを全員がしていたと確信している。少ない部員数の中で全員がベストコンディションで試合に出場することが難しいこともあり、関東大会あるいは全国大会への出場という成績は残せなかったが、一人の落伍者もなく同期全員がラグビーを愛し高校3年の全国大会予選終了までラグビーを続けられたことは、佐々木のキャプテンシーに皆が一丸となって結束できたことと誇りに思っている。又合わせて1年から3年まで顧問を努めてくれた堤武先生(11期体操部OB)の情熱ある指導により最後までやりとげる事の大切さを教えて頂いた結果によるものと感謝している。堤先生には23期生全員と公私に互いお世話になり、今もなお親交を深めている。

それでは23期生のメンバーを紹介する。

(1) プロップ 山口州男

地味ながら自分の責任を確実に果たし、黙々とラックからラックへ走る姿が今も目に残る。スクラムの要であった縁の下の力持ち。

(2) ロック 渡辺文雄

身長1m82cm、当時は超長身ロックであった。体重を増やすため夏合宿ではOBに無理矢理食べさせられていたが、そのお陰で3年時には走れる大型ロックとして活躍した。卒業時には明治大学よりスカウトの声もかかったラインアウトの名手。

(3) フランカー 秋祥哉

ハードタックルが売り物。試合中よくボールのないところで敵と戦っていた。足が早くバックスの経験もあるので、スワープで抜いて独走トライをすることもあった。持ち前のファイトを発揮して立教大学進学後ボクシング部の副将として活躍した。

(4) フランカー 佐藤茂(副将)

ファイトむき出しのプレー、頭から突っ込む姿が印象的であった。フォローのコース取りが巧くトライゲッターであった。激しい練習中でもFWを良くまとめチームメイトの信頼も厚かった。今も川崎ラグビースクールの指導者として少年ラグビーの育成に努めている。

(5) ナンバーエイト 八代義一

バックスもできる器用なフォワード、快速ナンバーエイトとしてボールを持って走る姿は迫力十分であった。横浜市立大進学後はポジションも念願のスタンドオフとなりチームの中心選手(主将)として活躍した。

(6) スクラムハーフ 高木晴生

足が早く俊敏性もありスクラムサイド攻撃が得意であった。成蹊大学進学後もスクラムハーフとして活躍した。今も同期の世話役としてFW、BKのつなぎ役をやってくれ、ダイビングパスの名手振りを発揮してくれている。

(7) スタンドオフ 持田豊

忠実なプレーヤーでその研究熱心さからキック、パスを暗くなってからも一人黙々と練習していた。確実なパッキングアップで敵をよくつぶしてくれたタックルの名手でもありチームメイトの信頼も厚かった。

(8) センターTB 佐々木晋之(主将)

千歳でラグビーをするために叔父北島忠治明治大学監督宅より通学していた。運動能力抜群でオール東京の盛岡遠征メンバーにも選出され非凡な才能を如何なく発揮した。チャンスメーカーでもあり、トライゲッターでもあった。明治大学進学後も1年生よりCTBにてレギュラー出場した。千歳の監督として29期生を関東大会出場に導いた。

(9) ウイングTB 中込守

1試合6トライの記録をもつ駿速ウイング。タッチキックのルール改正により3年よりFBに転向した。慶応大学においても3年時にウイングとして公式戦出場を果たした。母校の監督及びCRC幹事長として千歳ラグビーに貢献してくれている。

以上が23期生9名の勇士のプロフィールである。卒業後30年が過ぎ全員がそれぞれの人生の半ばを過ごしてきている訳だが、千歳高校ラグビー部での3年間の経験が各自それぞれの人生の中で大きな礎になっている

ことは否定できない事実である。先輩達が築いてくれた名門千歳高校ラグビー部を後輩に伝える役目を果たし、50周年記念誌の1ページに名を残すことの喜びを感じると共に、苦しくハードではあるが奥の深い魅力あるスポーツ、ラグビーを永遠に愛し続けたいと思う。
祝:千歳高等学校ラグビー部50周年!

（ 第 23 期
同期生からのことば ）

大事なことはいかにラグビーをしたかという事よりも、むしろその後の人生にいかにラグビーの精神を生かすかという事です。

高木晴生

毎日毎日キツイ練習の繰り返し。「何よりも基本が大切」ということを体で覚えた3年間。私の青春の貴重な1コマです。

八代義一

千歳高校ラグビー部OBであることの誇りと、一生の友人を得られたことの喜びが私の青春の大きな収穫であった。

中込守

夏合宿で諸先輩につきっきりで教えてもらったことが後日技術の向上に大きくつながったことを思い出します。今となっては楽しい思い出ばかりです

持田豊

役員の皆様いつも感謝しております。現在埼玉県に住んでいますが川崎市ラグビースクールへ毎日照日かよっています。

佐藤茂